

# マスコミ

小玉美恵子 治へ美人論 メディアは女性をどう変えたか(NHKブックス)は、明治の新聞・雑誌がいかに女性を表象してきたか、メディアがその生きざまをどのように伝えたかを現代社会に

対して与える役割や機能が果たしている役割を表現の三分類している。公共的内容が多く、社会のなかの(男性中心の)主流の人々が送り出すメジャー・コミュニケーション。主流から離れた考えや独自の情報であるためマス・メディアに載りにくいが社会的に重要だと考える事柄を発信するシェア・コミュニケーション。そして三つ目が「この」に配慮し、共感を呼びかける「コミュニケーション」である。

三・一一以降はメジャーへの批判も去ることながら、シェアやケアのコミュニケーションへの期待が高まりつつある。それでも従来のジャーナリズム機能も広義でいえば、これらの役割を果たしてきたのではないか。

たとえは、佐伯順子「明線」の取材中に被弾して死

シを連発メディアが別々に

存在するわけではないと断言されてきた。吉田則昭・岡田章子(編)『雑誌メディアの文化史―変貌する戦後パラダイム』(森話社)や三澤真美恵・川島真・佐藤卓己編著『電波・電影・電視―現代東アジアの連鎖するメディア』(書局社)、葦原俊洋(編)『「戦争」で読む日米関係100年―日露戦争から対テロ戦争まで』(朝日選書)により、日本社会が歩んできた道を再確認することも必要ではないか。

## 現在のメディアが果たす役割

三・一一以降はシェアやケアのコミュニケーションへの期待が高まりつつある

鈴木 木 雄 雅



Sや電子書籍を扱うメディア新時代ものがアマゾンにあふれている。マーティン・ファクラー『「本当のこと」を伝える日本の新聞』(双葉新書)やダン・ギルモア(平和博)『あなたがメディアノソーシャル新時代の情報術』(朝日新聞出版)はまさにその種の代表である。ファクラーのみならず、指摘される多くは既に日本のジャーナリズムが健全に

機能していない要因として語られてきた。吉田則昭・岡田章子(編)『雑誌メディアの文化史―変貌する戦後パラダイム』(森話社)や三澤真美恵・川島真・佐藤卓己編著『電波・電影・電視―現代東アジアの連鎖するメディア』(書局社)、葦原俊洋(編)『「戦争」で読む日米関係100年―日露戦争から対テロ戦争まで』(朝日選書)により、日本社会が歩んできた道を再確認することも必要ではないか。

そして、フレデリック・マルテル『メインストリーム―文化とメディアの世界戦争』(林はる芽訳、岩波書店)、佐藤卓己・渡辺靖・柴内康文(編)『ソフト・パワーのメディア文化政策―国際発信力を求めて』(新曜社)、そしてキク・アダット(福井昌子訳)『完璧なイメージ―映像メディアはいかに社会を変えるか』(早川書房)を読み比べることで、もう少しメディアの世界を広げてみよう。(すずき・ゆうが氏) 上智大学文学部教授・新聞学専攻)